



認知症の画像診断学

森 悦 朗

(大阪大学大学院連合小児発達学研究科行動神経学・神経精神医学寄附講座)

認知症は脳を侵す疾患によって生じるので、脳の検査は欠くことはできません。私も認知症診療の一環として脳の検査を常に利用してきました。ただし、私は放射線科医ではありませんので、画像診断に関して技術的なことや専門的なことは得意ではありません。この認知症の画像診断の講演では、臨床家としてより実践的な話、つまり日頃の私の診療における画像診断の使い方と診断のコツを紹介します。認知症の画像診断では、MRIやCTにて脳の質的変化(病理)や、量的変化・形態的变化を見ることができます。核医学検査すなわちSPECTやPETでは、静的局所脳機能を局所の脳血流やブドウ糖代謝によって計測し、神経伝達物質・受容体、アミロイドなどの異常蛋白の蓄積を画像化できます。これらを認知症の原因疾患の診断に使うのはもちろん、病巣-症候連関を介して認知症の症候の理解にも大いに役立てることができます。よく

ある画像診断の講演とは違って、この講演では最初に認知症の症候の成り立ちを理解するための画像の意義についてやや時間を割いて解説しようと思います。特にエピソード記憶と言語のシステムを中心に解説し、それらが侵される血管性認知症およびその理解のために **strategic-infarct dementia**, アルツハイマー病における健忘, 原発性進行性失語症についてもここで説明します。次に各論として、よく遭遇する頻度の高い認知症の原因疾患を取り上げます。第一にアルツハイマー型認知症を取り上げ、その後アルツハイマー病といかに鑑別するかということを意識しながら、レビー小体型認知症, 前頭葉側頭葉変性症, 進行性核上性麻痺, 大脳皮質基底核変性症, 最後に手術で改善できるので決して見逃してはならない特発性正常圧水頭症を取り上げます。